駒澤書翰

所長のひとり言

初秋の候、皆様におかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。お世話になります、所長の横山です。朝晩は秋の訪れを感じるようになりましたが、まだまだ日中の暑さは真夏そのものです。それもそのはず。気象庁の発表によると、今夏（６～８月）の日本の平均気温は平年を２・３６度上回り、１８９８年の統計開始以降で最高でした。これまでの記録だった２０２３年、２４年を上回り、３年連続で過去最高を記録したとのことです。もはや、その日の最高気温予想が３５度を超えていても、「今日も暑いな」とのありきたりの感想しかもたない自分に驚きます。地球温暖化は世界規模で取り組むべき深刻な問題ですが、今月号では身近な問題を。今月は「飲酒運転」に関する記事を紹介します。

２００７年の飲酒運転厳罰化により、全国の飲酒運転死亡事故は、年々減少傾向にありました。しかし、昨年は8年ぶりに増加に転じました。０７年の飲酒運転厳罰化の背景には、前年の福岡市での1～４歳の兄弟3児が亡くなる痛ましい飲酒運転事故がありました。事故から19年、飲酒運転により3児を奪われた母「大上（おおがみ）かおり」さんは、昨年の飲酒運転死亡事故の増加に危機感を覚え飲酒運転ゼロへむけ活動を始めます。彼女の１９年間に迫る記事、毎日新聞8月２４日付「もがいた１９年　みえた光」を紹介します。

飲酒運転は取り返しのつかない悲劇をもたらす。それを知らしめた事故がある。福岡市で幼い兄弟3人の命が奪われたあの事故だ。それから１９年。3児の母親である大上（おおがみ）かおりさん（４８）は7月11日、私立博多高校（福岡市）にいた。背後のスクリーンには亡き3人が映し出された。事故について語る初めての講演だ。「私の高校生からの夢と、それがかなった日、そしてそれを失った日、この三つを話します。」

大上さんは母親になるのが夢だった。大家族に憧れ、夫の哲央（あきお）さん（５２）のプロポーズに対する返事は「子どもをたくさん産んでいいですか」だった。講演では「待ちに待った陣痛が来た日も忘れません」と長男・紘彬（ひろあき）ちゃんの出産を語った。２００１年9月13日、失神するほどの痛みに耐えながら、深い幸福感に満たされたのを覚えている。「お母さんになるということは、命と命をつなぐことなんだ。赤ちゃんって、すごいなあ。」2年後には次男・倫彬（ともあき）ちゃん、さらに2年後に長女・紗彬（さあや）ちゃんを出産。「子育てが大変というより、子宝が増えていく、幸せしかなかった。」夜はベッドを横につなげ、親子5人で寝そべった。紗彬ちゃんの両脇に二人のお兄ちゃんがくっついて、3人で手をつないで寝る。その姿が目に焼き付いている。「時が止まればいい。」それが夫婦の口癖だった。

「次に、失った日の話をします。」講演で「あの日」の話にさしかかると、大上さんの声はやや小さくなり、次第に震えていった。０６年8月２５日午後１０時５０分、カブトムシを捕りに出かけた帰り道。家族5人を乗せた車は福岡市東区の「海の中道大橋」を走行中、高速度の車に追突された。車内に一気に水が入ってきた。割れたフロントガラスから大上さんと哲央さんは脱出。見上げると、走行していた橋が見えた。約１５メートル下の博多湾に落ちたことを理解した。「助けなきゃ。」沈みゆく車内から手探りで紗彬ちゃんと倫彬ちゃんを見つけた。哲央さんに2人を託し、また潜る。2度、3度、4度―。紘彬ちゃんだけ見つからない。5度目の潜水をしようとすると、2人を抱えて溺れそうになっている哲央さんの姿が見えた。「ひろくんを助けたい。でも3人が死んでしまう。」目の前に広がる絶望の光景。迷う時間すらない。「ひろーっ」。ありったけの声で泣き叫び、3人を助けに行った。哲央さんから倫彬ちゃんを受け取り、橋のたもとまで泳ぐ。倫彬ちゃんは夕飯のカレーを大上さんの肩に吐いた。「まだ生きている。」漁船に引き上げられ、病院に搬送されたが、倫彬ちゃん、紗彬ちゃんは息を引き取った。車内から紘彬ちゃんの遺体も見つかり3人全員の死亡が確認された。大上さんは講演の最後でこう呼びかけた。

第30号
発行日：
2025年9月21日
発行所：
株式会社エヌワイケー
〒154－0012
世田谷区駒沢5-7-6
電話：
03-3704-8391
FAX：
03-3703-7121
発行人：
横山和俊

「たった一つのかけがえのない命がつながって、みんながここにいます。飲酒運転は自ら選んで犯している犯罪です。飲酒運転の被害に遭って失われる命が、いまだにある。飲酒運転をしないことを選べる大人になってほしいです。」

「何か感じ取ってくれたかな。」講演後、報道陣に囲まれた大上さんはそう言って表情を緩ませた。深い喪失感に苦しみ、生き残ってしまったという罪悪感にもさいなまれてきた19年間。ここにたどりつくには「生かされた意味」について自問自答を繰り返す長い時間が必要だった。

事故当時、夫の哲央さんと大上さんのもとには連日、取材が殺到。飲酒運転撲滅の象徴的な存在として取り上げられた。「飲酒運転は悪い。でも当時は怒りの感情を持つ余裕すらなかった。3人の死をそっと悲しませてほしかった。」放心状態で取材を受け続けていた。心的外傷後ストレス障害（PTSD）を発症し、重度のうつ病と認定された。我慢してきた気持ちが診断時に一気に噴き出し、大泣きした。「うつなんかじゃない、子どもを亡くして悲しいだけ。」と反発したかった。出口の見えないトンネルの中で「なぜ、自分は生かされたのか」という問いの答えを探し求めた。「3人に会いたい。3人の面影が少しでもある兄弟を産みたい。自分は命をつなぐために生かされたんじゃないのか。」もう一度、お母さんになる―そう決心した。事故から約1年後の07年9月16日。大上家の次女が産声を上げた。「君は3人の代わりじゃない。君自信を愛している。」そう伝えたくて「愛子」と名付けた。しかし、闇のトンネルから抜け出すのは容易ではなかった。「よく産めるね。普通はできない。」心ない言葉を浴びせられ、動揺した。街で親子の会話を聞くと、嫉妬のような感情が湧き出た。我慢して笑顔を作っていたら突然限界がきた。心の糸がプツッと切れるのを感じた。精神科に1カ月入院した。疲弊した心身を癒したのは海外の空気だった。哲央さんの提案で海外に移住。うつ病は完全には治らなかったが、日本語が耳に入らなくなっただけでも心に余裕ができた。13年、愛子（17）さんが小学校に入学するタイミングで帰国。その間に三男・真寛（まひろ）さん、三女・ひかりさんを出産した。帰国後も気持ちの浮き沈みは続いた。心の傷をえぐるような言葉をぶつけられるのではないか。恐怖から壁を築いた。学校行事などで他の保護者とつながりが出来そうになると、強引に子どもを転校させた。特に恐れていた質問がある。「子どもは何人いるの？」だ。何気ない会話だが、行き着くところは「あの事故」。相手から「事故は過去のこと」とされたり、3人の死を軽視されたりしたらと考えると、ぞっとした。

そんな暗闇に一筋の光が差したのは16年4月、ひかりちゃんの幼稚園の入園式だった。当時は四男・寛彬（ひろき）さんを妊娠中だった。双子を抱えているという父親から「バツイチの主夫です」とざっくばらんに打ち明けられ、「何人目？」と尋ねられた。話しやすそうな方だから事故を受け入れてくれるかも。勇気を出して「7人目。飲酒運転の事故で3人亡くなったんです」と正直に伝えた。すると、男性は「思い出させるような質問をしてごめんね」と謝りつつ、自然体で受け止めてくれた。忘れていた「人の温かさ」を思い出した。その後、気兼ねなく話せるママ友もできた。社会との関りができると、体調も徐々に安定した。

一方、ずっと気にかけてきたことがある。心身の不調がピークの時に最も負担を掛けた愛子さんだ。大上さんの心が乱れる度、愛子さんは転校を余儀なくされた。小学校時代だけでも5回以上に及び、在籍が1カ月ほどだった学校もある。それでも愛子さんは不満を漏らさなかったという。事故の詳細を初めて聞いたのは小学5年生の時。その際、母が漏らした「もう、100％幸せにはなれない」との一言が忘れられない。中学生になり、「あの事故」について自ら調べるようになった。感情があふれた。加害者への激しい怒り。心を病んだ母の悲しみや、亡くなった兄姉の無念。その時、母から何度も掛けられた言葉を思い出した。「命があるのは、当たり前ではなく、奇跡。その命を大切に精一杯生きようね。」母の苦難に満ちた人生を知り、この言葉がさらに深く心に刻まれた。今、愛子さんは言う。「ふがいない母と思ったことは全くない。強くて優しい、一番尊敬している人」

24年、飲酒運転による死亡事故件数は全国で140件と前年比28件増となった。危機感を抱いた大上さんは「生かされた意味」の一つの答えとして、若い世代に事故を語り継ぐ決意をした。「3人の代弁者として飲酒運転撲滅のメッセージを伝えたい。それが残された者の使命だから。」

次回31号は10月19日発行予定です